

vol.46

失われた光景の幻視

文 島田 雅彦

text by Masahiko Shimada

東京は木造の家が密集しているため、江戸時代から何度も大火があったし、震災も空襲もあった。米軍も東京がよく燃える都市であることを見越して、焼夷弾をばら撒いたのだった。その都度、焼跡から復興してきた歴史がある。そういう土地なので、ヨーロッパの都市に比べるとなかなか歴史の痕跡は残りにくい。近代以降の建造物で、百年以上経過しているものは滅多になく、高度成長時代はビルの寿命も短く設定していて、約五年で街の景観が十パーセント変わるといわれていた。五百年前と街並みが変わらないヴェネチアとは正反対の、極めて新陳代謝が激しい都市なので、過去の痕跡を風景の中に見出すことはできない。それこそ折々の東京しかないわけだが、往時の東京の様態を伝えるコトバは残っている。

永井荷風や川端康成、江戸川乱歩によって書かれた浅草などはその好例で、今は存在しない凌雲閣や見せもの小屋があった頃の光景は彼らの小説を通じて、幻視するほかない。近代東京の中で最も古い繁華街である浅草は、明治

時代から遊び人の集まる場所で、私の祖父も若い頃の思い出を孫の私に語ってくれたことがある。過去が露出している場所がところどころにあって、しばしばタイムスリップして異界に迷い込んだ気になる。

ニューヨークやパリに滞在していた永井荷風は目的もなく街を歩く「遊歩者」の典型で、晩年に至るまで場末の散策を趣味にしていた。『ぼくとうきだん 濠東綺譚』を読むと、よっぽど暇だったんだなと思う。隅田川の向こう側に行く時は、怪しまれないよう、古ズボンに古下駄をはき、古手拭を下げたりして、その場に馴染むコスプレまでしている。玉の井で雨に降られた時に、傘に入れてやったお雪という女と懇意になり、いわゆるパパ活めいたこともやっている。

失われていく風景に対する愛惜の念は、過去を知っている者だけが抱くのだが、新陳代謝や再開発の結果、現れる新名所や、新しいランドマークにも散歩者は好奇心を抱く。家に帰っても誰もいない独身者は誰よりも貪欲に街歩きをし、都内の繁華街を自分の茶の間にし、また応接間にし、普段から全財産をカバンに入れて持ち歩いていたようである。

Profile

1961年東京生まれ。1984年東京外国語大学ロシア語学科卒。在学中の1983年『優しいサヨクのための嬉遊曲』でデビュー。主な作品に『自由死刑』、『退廃姉妹』（伊藤整文学賞）、『悪貨』、『虚人の星』（毎日出版文化賞）、『君が異端だった頃』（読売文学賞）ほか多数。『忠臣蔵』、『Jr. バタフライ』のオペラ台本もある。芥川賞選考委員。法政大学国際文化学部教授